卒業論文主旨

昭和38年度

御勅使川扇状地における地形及び農業的土地利用の特色について

岩下　茂子

(1) 研究の目的及び論文の構成

地理を専攻してはじめて作成する論文としては、今迄に学んだ事を総復習するという意味において、又これから何か研究する場合のbaseとして、ある地域を色々な面から考察するのが適当であると思い、調査地域に御勅使川扇状地を選び、その地域における自然及び人物両者の相互関係による地域性の把握ということを研究の目的とした。自然の面では、地形に重点をおき、微地形的な考察を試み、御勅使川扇状地の地形のもつ問題点の把握に努めた。人文の面では農業を取りあげ、農業の特色及び扇状地という地形がどのように影響しているかを考察することに努めた。

以上述べたような研究の目的に従い、論文の構成は次のように行った。

第一章　調査地域概説

§1.　調査地域の位置

§2.　自然地理的環境

a、地質　b、地形　c、気候

§3.　人文地理的環境

a、交通　b、集落　c、産業

第二章　御勅使川扇状地における地形的自然について

§1.　地形の形状

§2.　地形面の分類

§3.　地形面と表層物質との関係

§4.　地下水

§5.　御勅使川扇状地の地形的構造に関する問題点。

第三章　御勅使川扇状地における農業的土地利用について。

§1.　土地利用の変遷

§2、水　利

§3、土地利用の現況

§4、抽出した三集落における土地利用　―西野、飯野、豊を例にして―

§5、要　約

(2) 調査地域

甲府盆地西部は従来赤石階段断層崖といわれているが、御勅使川扇状地は、甲府盆地西部に位置し、赤石階段断層崖下に発達した標式的扇状地である。又本扇状地は開発の歴史が相当古いにもかかわらず、現在まで、扇状部においては水田化が及ばなかつたことは一つの特徴である。

(3) 御勅使川扇状地の地形的自然

御勅使川扇状地の地形考察に当つては、はじめに扇状地の横縦断面図等の作成により地形の形状を掴み、次に4万の空中写真、文献及びboring等の野外調査の結果を総合して、扇状地を次のように7つの地形図に分類した。

(1)扇状地Ⅰ面　　(2)扇状地Ⅱ面

(3)扇状地Ⅲ面　　(4)旧河道面

(5)すそ合い谷面　　(6)現勅使河原

(7)釜無川沖積地

本扇状地考察に当つては次の諸点が問題となる。一つは扇状地の一部にみられるシルトの堆積であり、一つは釜無川との境に生じたくい違う2列の崖である。

シルトの成因については、本論文では背後の山地を構成する岩石の岩質によるものであるという考え方をとり、一方シルトの有無が扇状地Ⅰ面と扇状地Ⅱ、Ⅲ面を分ける鍵となつたのであるが、扇状地Ⅱ面とⅢ面のシルトについては、色、質等に差異が認められたが、2つの面を区別しうるはつきりした手掛りはつかめなかつた。次に釜無川との境に生じた崖については、釜無川の側侵蝕によるという説と、断層又は撓曲に由来するという説が可能であり、いずれを取るかによつて扇状地Ⅱ面とⅢ面は、時代的にみて同一のものと、異るものとと考えられる。

単調と考えられた本扇状地もこのような問題を含んでいる。

(4) 御勅使川扇状地の農業的土地利用

御勅使川扇状地はその位置的関係により水利に難易を生じ、農業様式を異にしている。すなわち扇頂扇端部は水利に恵まれ水田化されているのに比べて、扇央部までは水田化が及ばず、そこでは果樹、養蚕、温室等

の集約的商品農業が行われている。本論文では、このような扇央部に隣接して位置する。果樹中心の西野、果樹、養蚕、温室の豊、水田、養蚕、温室の飯野にみられる土地利用の地域的相異について考察した。

特に西野、豊においては自然条件は殆んど同じであるにもかかわらずこのような差異が生じたのは、耕地面積の大小、及び農家人口の大小が考えられ、一人当りの耕地面積の狭い豊、飯野には温室などの集約的農業がとり入れられていると考えられる。

又西野にいち早く果樹が導入された原因については、西野村の積極的な農民性というようなものが考えられた。

なお、最近では御勅使川扇状地においては、畑地灌漑計画も実行に移され、養蚕業の減少、果樹の増殖が著しい。

野田市の地理学的考察

坂戸かほる

マンモス都市東京に寄生する衛生都市が近年数量とも急激に増加している。bed town化した都市には、住宅団地が続々と造られ、又首都圏整備法にもとずく工業の地方分散化計画にあいまつて、工場団地が各地に形成されつつある。このように、急激に、機能的にも形態的にも変化している首都圏内の都市の状況を卒論で扱かつてみたいと考えて、千葉県野田市を選んだ。

千葉県は、周囲の65%が海、35%が河川で全く水に囲まれ、しかも北部の江戸川、利根川筋は湖沼低湿地帯で、陸路の交通を妨げ、江戸からの五街道にもふれず、孤立文化圏を形成していた。その千葉県の北西端、利根、江戸両河川に挟まれ、関東平野の中央部に突出して、クサビを打つたような位置に、卒論の調査地「野田市」がある。

クサビの先端は関宿町があるが、それに続いて両河川が南流する南隣4～8km の楔形をした地域が野田市で、市の繁華街はその西寄り江戸川に接している。この関東平野の中心部の突出地点は、河川が重要な交通手段であつた時代には、有利な位置になつた。この河川交通の利用によつて、全国に有名な醸造業が発達していつたのである。

銚子の醤油、佐原の酒は利根川沿いに野田の醤油、流山の味淋は江戸川沿いに位置し、河川輸送により、大消費地江戸へと出荷されていた。河川交通から陸上交通に移る前に全国的に不動の地位を築いたので、現在も続いているが、野田より発祥において歴史の古い銚子は、消費地江戸との距離が